



発行所  
公益社団法人 国民文化研究会  
(九州←東京←全国)  
東京都渋谷区東1-13-1-402  
振替 00170-1-60507  
電話 03-5468-6230  
FAX 03-5468-1470  
http://www.kokubunken.or.jp/  
E-mail: info@kokubunken.or.jp  
月刊「国民同胞」編集部  
毎月一回10日発行  
購読料 年間2000円

### あらためて思ふ「国民の責務」

―御代替りとともに経験して―

理事長 今林賢郁

令和の時代を迎へて三ヶ月が過ぎた。新元号は圧倒的多数の国民に好感をもって受け入れられ、新帝の即位を寿ぐ声は国内に溢れた。今回の慶事を国民がひとしく経験するなかで、久しく忘れてゐた大事なものを思ひ出したかのやうに、人々の心が一点に集中したのはうれしいことであつたが、一時の興奮と熱中が過ぎ去つていつもの日々が戻りつつある今、此度の民族的経験を一過性に終らせることなく機会ある毎に喚び起していきたいものである。

先帝と新帝のお言葉をふたつながら拝した今回の御代替りは、あらためてわが国の「国がら」がしきりと思はれたことであつた。少し振り返つて見たい。

先帝陛下は二月の「御在位三十年記念式典」において、自分が天皇としての務めを果してこられたのは、天皇が国民統合の象徴であること

に「誇りと喜びを持つことができる人々の存在」と「長い年月をかけて日本人がつくりあげてきた民度」のお蔭であつたと述べられ、また「退位礼」では、「国民への深い信頼と敬愛」をもって天皇の務めを行ふことができたのは「幸せ」なことであり、「象徴としての私を受け入れ支えてくれた国民に心から感謝」したいと語られた。

新帝陛下は「即位後朝見の儀」において、上皇陛下が三十年以上の長きにわたり「いかなる時も国民と苦楽を共にされながら」象徴の務めを果されたお姿に「心からの敬意と感謝」を捧げられ、皇位を継承するにあたり「上皇陛下のこれまでの歩みに深く思いを致し、また、歴代の天皇のなさりようを心にとどめ」「常に国民を思い、国民に寄り添いながら」象徴として責務を果していきなると述べられた。ここに一部引用し

たお言葉の全文を繰り返し読み味はつてみると、天皇の、国民への深い信頼と国父としてのお心が痛いほどに伝はつてきて身に沁みる。

さう思つてみると、昭和天皇の玉音放送（終戦の詔書）の中の「茲ニ国体ヲ護持シ得テ；常ニ爾臣民ト共ニ在リ」の一句が心に浮んだ。先の大戦に敗れ誰もが国の行末に不安を覚えてゐた、まさにその時、昭和天皇は「国体ヲ護持シ得テ」と仰せられたのである。一体、昭和天皇にはどんな確信があたりだつたのだらう。

夜久正雄先生は『歌人・今上天皇』（増補改訂版・昭和五十一年）のなかで、昭和天皇の終戦時の御製三首に言及されてゐるが、その三首目、

国がらをただ守らんといはら道す  
すみゆくともいくさとめけり

について、「国がらをただ守らむ」とは「天皇様が身はいかならむ」と決心して国民をお守りくださることにほかならない。天皇さまはさう述べられたのである。天皇さまは国がらを守りぬかれたのである」とお書きになつてゐる。目が覚める思ひでこの一節を拝読しながら、「国体ヲ護持シ得テ」とは、自分が信頼する国民が残つてゐさへすれば国が亡ぶことはないとの信念のもとに、国民を滅亡の淵から救ひ出された、まさにそのお心の表明であり、「シ得

テ」といふ確たるお言葉には、国民を守り抜くことで「国体ヲ護持」できたとの確信が込められてゐると思はせしめられたことであつた。

我が国では古来、天皇を「天の下しるしめすすめらみこと」「天の下きこしめすすめらみこと」と尊称してきた。「しろしめす」は「知る」、「きこしめす」は「聴く」の敬語だが、先人たちは天皇は国民のことを隅々までお知りになつてゐる、また

民の声を一言も聞き漏らすまいとお聴き下さる、そのやうな御方であると天皇を信じ忠誠を尽してきた。「しろしめす」「きこしめす」天皇

と、そのお心を「知り」「聴いて」発奮する国民。この君臣相互の絶対的信頼のなかに日本の国柄はある。

では、国柄を保持する一方の当事者である国民がお心を「知らう」「聴かう」とする努力を怠ればどうなるか。天皇への無知と無関心が進む中、興味本位の週刊誌的報道の波に呑み込まれてしまふかも知れない。それは外でもない、国民の側から国がらを傷つけてしまふことである。

さうした風潮に翻弄されないために、一人でも多くの国民が事の真贋を見極める力を身につけなければならぬ。それは此度の御代替りをもに経験した国民に課された責務といふものであらう。